

協創力体験演習Ⅰ 初年度受講学生における「協創力」のとらえ方

堀井徳光, 浅原知恵, 柴沼 真
三國信夫, 上田秀雄

要 旨

【目的】城西大学では2024年度より全学部共通の必修科目（3年までの積み上げ式）として、「協創力体験演習」が開講された。本科目は、課題に対して、議論等の能動的な取り組みから、協創を体験し、相互理解・相互尊重の態度や課題解決の能力を身につけることを目的としている。本研究の目的は、2024年度開講新規科目の振り返りとして、受講生の感じた「協創力」がどのような概念であるかをテキストマイニングの手法を用いて探索的に検討し、得られた示唆から本演習の充実を図るための手掛かりを得ることである。【方法】本研究では授業後アンケートおよび、課題のテキストデータを分析に用いた。調査対象は、研究者担当1クラス61名とした。

【結果および考察】自身の言葉で「協創力」を定義する課題のテキスト分析では、文系学生の回答は、「課題」に「取り組む」と共起し、更に「意見」には「聞く」「尊重」などの受動的態度に関する語の共起が抽出された。一方で、理系学生の回答では、「課題」には、「解決」が共起し、さらに、「意見」については「出し合う」などの能動的態度に関する語が共起していた。これらのことから、同じ演習であっても、実感した「協創力」に関する印象構造は、所属学科によって異なる解釈がなされる可能性が示唆された。今後、これらの結果を踏まえ文系・理系学生の受け止めの違いを考慮しながら、上位学年の演習内容を検討する必要がある。

キーワード：協創力, 全学共通科目, アクティブラーニング

1. はじめに

城西大学（5学部：薬学部、理学部、経済学部、経営学部および現代政策学部）では2024年度より全学部共通の必修科目（3年までの積み上げ式）として、「協創力体験演習」が開講された。本科目は、課題に対して、議論等の能動的な取り組みから、協創を体験し、相互理解・相互尊重の態度や課題解決の能力を身につけることを目的としている。なお、本科目における協創力とは、「多様な人々の言葉に耳を傾け、自分の考えを伝

えながら交流することによってお互いを理解し、尊重し、皆と協力して新しい価値を創り出していくとする力」と定義して、初年度演習を開始した。「協創」を体験する事は、教養科目としてのみならず、薬剤師養成課程の初等教育において、チーム医療を実践するための基本的能力の獲得に役に立つと考えられる。本研究の目的は、2024年度開講新規科目の振り返りとして、課題についてのテキストマイニング分析から「協創力」を構成する要素を検討し、得られた示唆から本演習の充実を図るための手掛かりを得ることである。

2. 方法

2.1 協力者

研究には研究者担当教室学生61名の協力を得た。また、本研究は本学倫理審査委員会にて、倫理申請不要との回答を得た。

2.2 授業概要

授業は全学部混成の少人数グループで自己紹介やアイスブレイクなどの複数のアクティビティを取り入れた合同演習を実施した。具体的には、第1回・第2回では、「心理的に安全な空間を体験する」を目標に、心理的安全性に関する講義やグループ活動を通じて、安心して意見交換できる環境づくりを体験した。第3回・第4回では、「多様性を実感する」を目標に、感じ方やとらえ方の違いを体験的に学び、個性の異なるメンバーが協力することで生まれる力を実感した。第5回・第6回では、「コミュニケーションを理解する」を目標に、対話や役割分担に関する講義と演習を通じて、協創に必要なコミュニケーションスキルの習得を図った。

2.3 対象とする資料と分析方法

7回目の授業最終回に自由記述課題【あなたは「協創力」とはどういうものだと思いますか。あなたの言葉で「協創力」を定義してください。

(100字程度)】を課した。本研究では本課題のテキストデータを分析に用いた。分析にはKH Coderを用いた計量テキスト分析を行った。テキストマイニングの計量テキスト分析は、文章データを単語ごとに切り取り、質的データをコーディングによって数値化し、計量的分析手法を適用して、データを整理、分析、解釈する方法である^{1, 2)}(酒井ら2022, 片田ら2022)。分析の前処理として、データの誤字を含むファイルチェックを行ったうえで、自動抽出でうまく1つの語として

抽出されていない「協創力」「協創」を分析対象の主要な語として強制的に抽出する語に指定した。また、結果の解釈に不要な「思う」「考える」「感じる」は助詞的であり、分析対象と考えられないため、使用しない語に指定し、分析対象から除外した。前処理を実行した後、頻出用語を集計した。次いで、課題レポートがどのような話題で構成されているかを検討するため、共起ネットワーク分析を行い、共起ネットワーク図を作成した。

3. 結果

3.1 頻出語について

テキストマイニングの結果、総抽出語のうち出現回数の多い上位20位を表1に示す。分析対象に文系学生の方が多かったことから、全学部の頻出語リストは、文系と類似した。また文系および理系の頻出語を比較した結果、「協力」「人」が共通して上位であった。また、頻出語の順位は異なるものの、多くの頻出語は類似の文脈で使用されていた。しかしながら、「課題」という語に関しては文系と理系でやや異なる文脈で使用されていた。そのため、文理別の共起ネットワーク分析では「課題」に注目した。

3.2 共起ネットワークについて

全学部の共起ネットワークを図1に示す。共起ネットワーク図を見ると、「協創力」「人」「協力」といった語が共起しているグループ(subgraph 1), 「意見」「聞く」「出し合う」「尊重」「多様」といった語が共起しているグループ(subgraph 2), 「課題」「解決」「価値」「認める」「新しい」といった語が共起しているグループ(subgraph 3), また「心理」と「安全」が共起しているグループ(subgraph 8)に分類された。

次に、文系の共起ネットワークを図2に示す。

表1 学部別頻出語句上位20語

全学部			文系学部			理系学部		
抽出語	出現回数	出現率	抽出語	出現回数	出現率	抽出語	出現回数	出現率
協力	43	12%	協創力	33	11%	協力	19	13%
協創力	39	11%	協力	24	8%	人	11	7%
人	35	10%	人	24	8%	力	9	6%
力	30	8%	意見	23	8%	解決	7	5%
意見	26	7%	力	21	7%	相手	7	5%
自分	19	5%	自分	15	5%	課題	6	4%
解決	14	4%	考え	11	4%	価値	5	3%
相手	14	4%	コミュニケーション	9	3%	協創力	5	3%
価値	13	4%	価値	8	3%	新しい	5	3%
コミュニケーション	12	3%	創造	8	3%	創る	5	3%
課題	12	3%	解決	7	2%	問題	4	3%
創る	12	3%	創る	7	2%	コミュニケーション	3	2%
考え	11	3%	相手	7	2%	意見	3	2%
創造	11	3%	知る	7	2%	一つ	3	2%
新しい	9	3%	課題	6	2%	一緒	3	2%
知る	8	2%	共に	6	2%	個人	3	2%
関係	7	2%	作る	6	2%	創造	3	2%
共に	7	2%	仲間	6	2%	他	3	2%
他	7	2%	関係	5	2%	知識	3	2%
問題	7	2%	共有	5	2%	お互い	2	1%

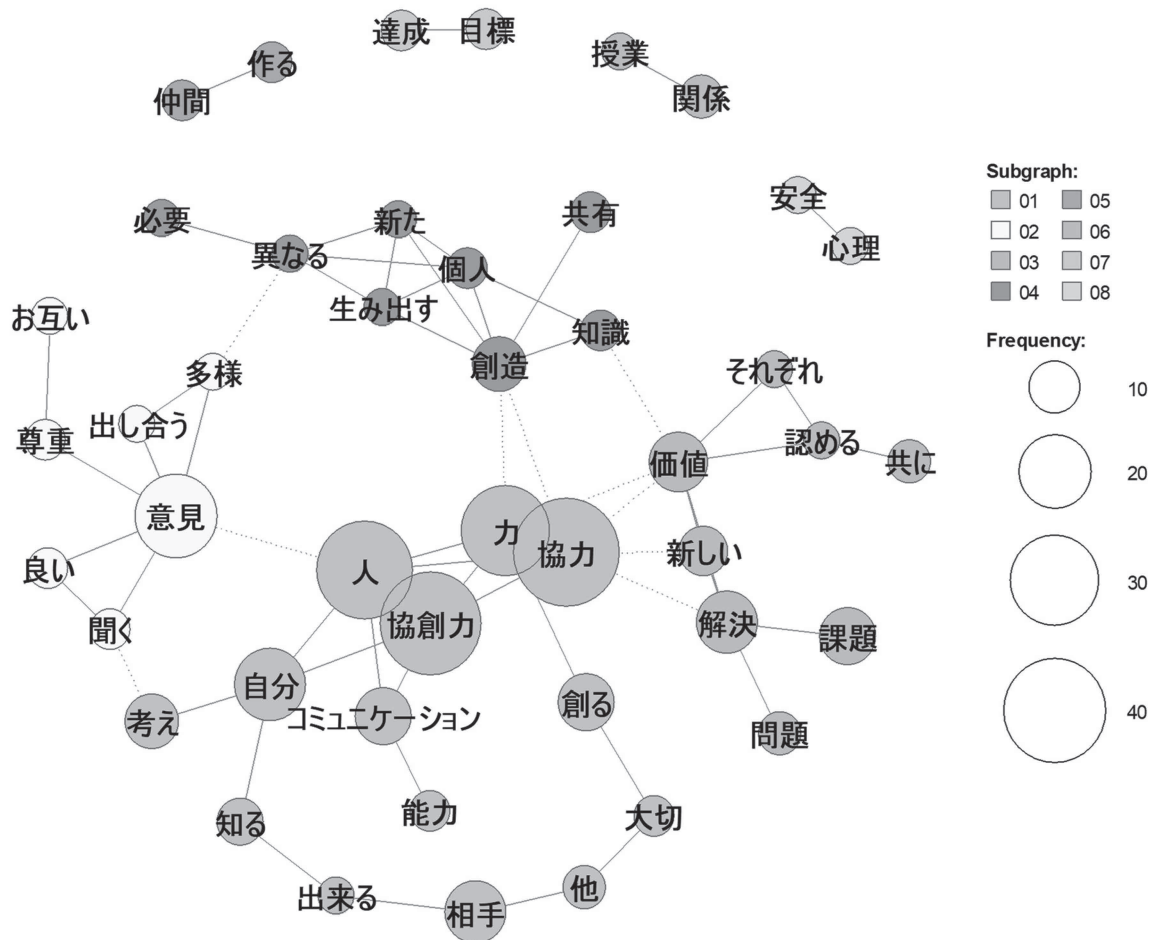


図1 全学部の共起ネットワーク

「課題」という語の繋がりを見ると、「取り組む」と共起し、「解決」とは弱く共起していることが見て取れた。また、課題が属しているグループ(subgraph 4)を見ると、「意見」「聞く」「尊重」「否定」であった。ここでの「否定」は「否定しない」という文脈で使用されていた。このことから、文系では、「課題」が「取り組む」「尊重」「聞く」および「否定しない」といった受容的な行動を表す語と共起することが示された。

理系の共起ネットワークを図3に示す。「課題」という語の繋がりを見ると、「解決」と共起し、「協力」と同じグループ(subgraph 2)に属していることが見て取れた。また、「課題」が属しているグループは「意見」や「出し合う」「作り上げる」といった語を含むグループ(subgraph 1)と弱く共起していることが分かった。このことから、理系では、課題が「解決」「協力」に繋がり、更には、「意見」「作り上げる」「出し合う」といった能動的な行動を表す語と共起することが示された。

4. 考察

全学部の共起ネットワーク図には、本講義で示した「協創力」の定義と、初年度の目的である「心理的に安全な空間を体験する」「多様性を体験する」を反映する共起が確認された。このことから、講義内で説明した「協創力」の定義および、授業内容は受講生の思い描く協創力に反映されたものとする。さらに、文系及び理系学生の「協創力」の捉え方について、「課題」に注目して分析した結果、文系の学生は受容的な態度で課題に取り組むプロセスを重要視している可能性が示唆された。一方で、理系の学生は能動的な態度で課題を解決するという最終的な目的を意識している可能性が示唆された。これらの違いは、協創する過程で、文系学生は他者との関係性の構

築や維持をより志向し、理系学生は問題の解決をより志向する傾向があると解釈できる。橋本ら(2014)は、文系学生の方が理系学生よりも「自己洞察」「状況洞察」の能力が高い、つまり、他者の気持ちに配慮しながら周りの状況を的確に判断しつつ、自己の感情状態に対して十分に認識している傾向が高いことを報告しており³⁾、本研究の文系学生の「受容的」な特性を裏付ける可能性がある。一方、白鳥ら(2004)は、看護学生及び医学生は文系学部の学生に比べて「関心」が高い傾向を示す、つまり、他者への奉仕に高い関心を持っていると報告している⁴⁾。このことは、本研究の理系学生が「能動的」な特性を持つことに影響している可能性がある。以上のことから、次年度以降の演習では、他者を受容しつつ良好な関係を築いていこうとする、主として文系学生の傾向と、課題の解決という目標の達成に向けて行動を起こそうとする、主として理系学生の傾向を、教員が理解し、双方の相対的な強みを活かして協創していけるよう働きかけることが重要だと考えられる。

本研究の限界として、一人の教員による単一クラスの評価であるため、受講生全体の概念化と捉えることは難しい。今後は、全クラスのレポート課題を分析することで、より広範な受講生における「協創力」の捉え方の傾向や違いを明らかにし、本研究の一般化可能性を高めることができると考えられる。

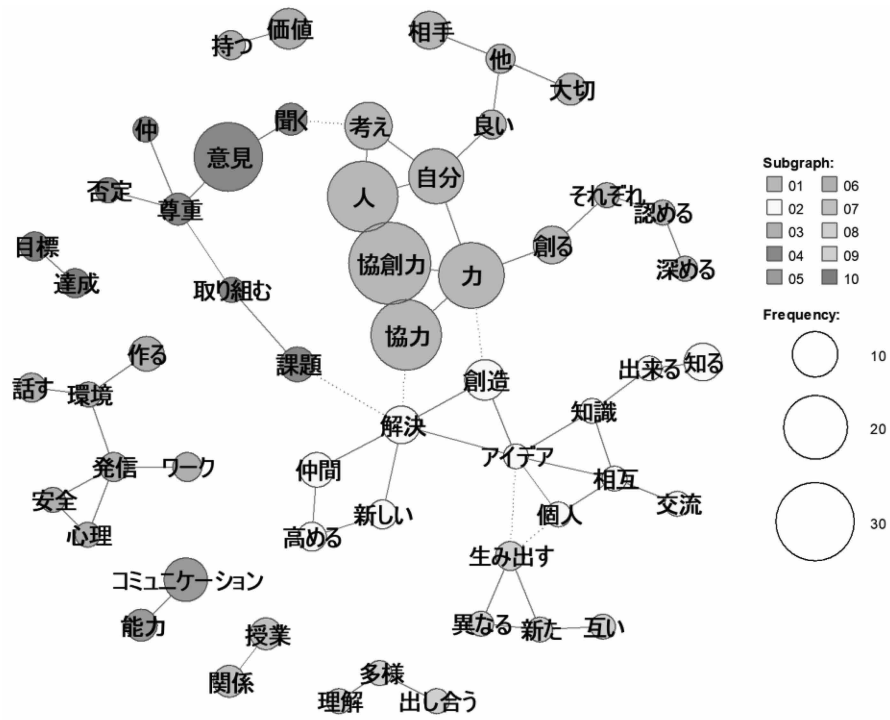


図2 文系の共起ネットワーク

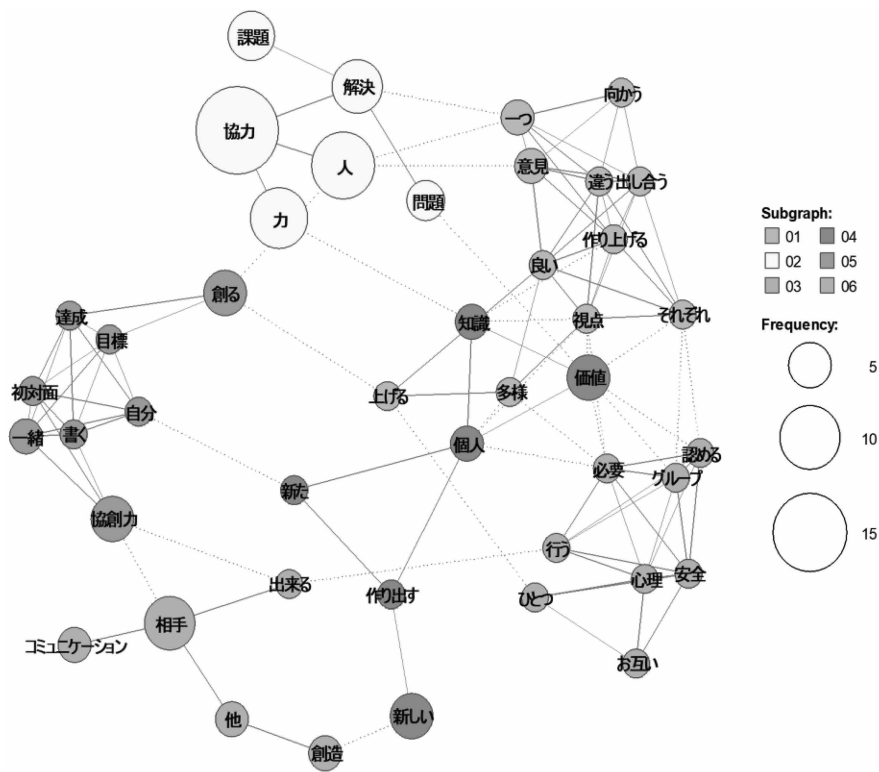


図3 理系の共起ネットワーク

参考文献

- 1) 酒井太一・岩清水伴美 (2022). 看護大学生における授業での「主体的学習」の概念分析：テキストマイニング. 日本看護学教育学会誌, 32 (2), 67-79.
- 2) 片田千尋・荻野待子・鈴木千枝・増田富美子・高谷知史 (2022). テキストマイニング分析による看護師と看護系大学生の捉えた患者に必要なケア：Fundamental of Careの概念枠組みを用いた比較. 日本看護学教育学会誌, 32 (2), 55-66.
- 3) 橋本由里・平井由佳 (2014). 専攻別比較からみた看護学生の情動知能特性. 島根県立大学紀要, 9, 9-16.
- 4) 白鳥さつき・佐藤公美子・比江島欣慎 (2004). 看護学生・医学生の職業適応と自我状態に関する研究. 医学教育, 35 (4), 235-244.